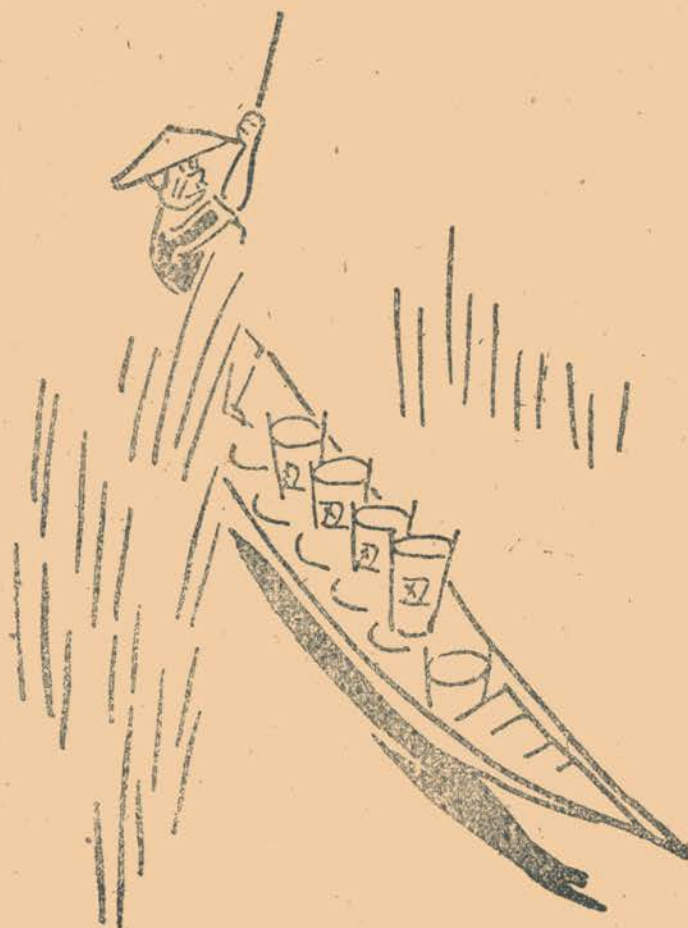


川柳の雑証

麻生路郎★主宰



五月號

pensoj flugas trans la land-limon

Senryu Zasshi

No. 264

昭和十三年五月一日発行
印刷所 東京 日本橋区 日本橋 日本橋 日本橋

毎月一回 二頁發行

創刊大正十三年・通巻二百六十四号



續川柳講座

麻生路郎

推敲に就て

いゝ想が浮んで、ちとどろに一句出来たと假定いたします。それが名句だと申分がないのでありますが、折角句に纏めては見たが、表現技巧が拙いために、自分の想と表現とが巧く合致してない場合、殆んどそれに近い表現にはなつてゐても、モ一つびつたりしない場合があるものであります。

常に多読多作をしてゐる作家は句の構成が想即表現に近い状態であるものであります。ところが、そうでない人達、殊に初心者にとつては、想と表現との間に思ひもよらぬ隔りが出来るものであります。従つて、出来上つた句をよく検討して最後の仕上げをしななければならぬのであります。この仕上げを私は推敲と呼んで居ります。俳聖蕉芭は推敲のことを「言葉正す」と云つて居ります。句が平言俗語で構成されてゐてもそれが最適の表現になつてゐたならば、言葉正したことになる訳であります。推敲と云う言葉は詩の上で昔から慣用されてゐる言葉であります。杜甫

などと云う詩人はあまりに推敲に凝りすぎてそのために瘦せてゐた云うことでもあります。川柳家でも、目車などは鍊骨彫心と云う推敲をして居りました。彼の句が実に軽妙であり、幽艶であり、何んか苦もなく生れ出たやうに感じられるのも、彼の天稟の資質以外に推敲のたまものだと思はせられるのであります。「雪」時代の彼は、句帖を携えて毎日のやうに私を訪れて、その推敲ぶりについて意見を徴しました。そして更に推敲に推敲を重ねたものであります。彼にしてそれほどの推敲をしたのであります。近ごろの作家はどつちかと云へば作りつぱなしの句が多く、所謂推敲らしい推敲をしてゐないやうであります。名句を得られない原因の一つに数えることが出来ます。推敲と云うことは句に限つた訳ではなく、文章でも推敲の必要は大いにあるのであります。それは同じ事を表現するのに幾通りも手法があるからであります。例へば僕と彼女の女との愛情の關係に就ても次の六通りに表現することが出来るのであります。

- (A) 僕が彼の女を愛した。
 - (B) 彼の女を僕が愛した。
 - (C) 僕が愛したよ、彼の女を。
 - (D) 彼の女を愛したよ、僕が。
 - (E) 愛したよ、僕が彼の女を。
 - (F) 愛したよ、彼の女を僕が。
- 以上の例から見ても最も力強く表現するには、どの手法が最も適してゐるか云うことを決定するのが推敲なのであります。
- 句に於ても、矢張り語や詞の配置轉換によつて推敲をいたします。例へば句屑の中から

薄情な人と出逢つた我橋
 どういう句を拾ひ上げ、もう一度読み返して見ます。これは平敘法の句であつて、このまゝではピンと来ないのであります。そこで我橋の下五を上五にして、
 我橋薄情な人と出逢つたり
 とすれば、表現の上に強さが加味されて、其の場の情景が前句よりも躍動いたします。しかし、それは語詞の配置轉換によつて、幾らか句の價值が上昇したと云うに過ぎないのであります。では、斯うした語詞の配置轉換によつて句の價值が上昇したから入選したかと申しますと、矢張り没になつたのであります。それは推敲をしなかつたからではなく、内容が既に云ひ陳るされてゐたからであります。しかし、例へば没にならうとも一應推敲して見るだけの努力はあつて欲しいのであります。更に余韻の選振、語詞の短縮や延長によつて、意外な佳吟にならぬとは断言出来ないのでありますから、この句意をどうしても生かしたい場合には更に／＼推敲に腐心する必要があるのであります。

わが娘廿四になりハツとする
 と云う句が仮りに出来たといひます。これだけでは父としての悩みは判るにしても、表現技巧が幼稚なので、力強さが足りません。ジツと味つて見ると何となく物足りなさを感じさせられ、文学的作品としての川柳にはなつてゐません。そこで
 思はざりき娘が廿四にもなり
 と倒置法の句といたしますと、グツと句の價值が上昇いたします。詰まり「ハツとする」が「思はざりき」となつたので一段と句意が強められたわけでありまして、「わが娘」の「わが」を棄て、我が娘であることには変りがありません。そして「廿四になり」を「廿四にもなり」と「も」を入れただけでも、父の驚き、父の悩みを強めるのに役立つて居ります。字詞の選振はこの点から考へても推敲上に重要さを持つものであります。

ります。
 推敲は句の調子をよくするものであります。調子がよくなつたために、句の面白味が失はれることもあります。例へば靜觀堂の
 いつそちぎらうかシャツの
 ぶらぶら鉤
 のやうな句は、七音、三音、七音という類例の妙な語詞の配置がかへつて、この句を生かしてゐるのであつて、これを推敲の結果、五音、七音、五音の句に纏めあげたら、至極平凡な句になつてしまふだらうと考えられます。一概に推敲と云つても内容にのみ腐心して、調子や字詞の推敲の内容を凡化させてしまつては句の生命を失つてしまふもの

男女両性に作用する

プレホルモン

塩野義製薬 皮下注射・錠劑

であります。

推敲に際して字麁の選択と云うことは難しい問題で、その句を生かすのに、最適のものを選まなければならぬのであります。句は荒けつりのまゝの表現の方がかへつて味があつて面白い場合もありまゝすし、細心に、繊細に、磨き上げた璧のやうな句とすること、最高至純の名句となる場合もあるのであります。推敲を完璧なものにするためには、常に同意語や類似語について知つておく必要があるし語彙の豊かさがなければならぬので、少しでも疑義があれば辞書をひく煩をいとはないことでもあります。

句品のこと

古句に

持参金よく／＼見れば鼻も
あり

弁当と小町は馬鹿だなア娘

添乳して棚に鯛にござりやす

と云うやうな句があります。

こんな句品の句があるので十把一ト括げに川柳は下品だといふ、まことにありがたくな批評をうけるのであります。が、多くは下品な狂句の濡れ衣なのであります。古句にしても、

松の内麻上下の袖たたみ

淋しいも秋おごるくも秋の空

神代より日月今に地におちす

のやうな上品な句もあつたの

であります。

昔は句品を高番、中番、末番と称してゐました。高番というのは、「淋しいも秋」のやうな上品な句で、末番は破礼句のことで、その他を中番と云つたのであります。川柳は平言俗語で詠まれ社会性を帯びてゐたので、勢ひ上品でないやうに云はれたのであります。上品だというのが、和歌のやうな貴族趣味、古典趣味の謂ひであれば平言俗語で表現される川柳が下品視されたのもいはいのなないことではありませぬ。しかし、貴族趣味、古典趣味、上品な句が必ずしも文藝的に優秀な句であるに限つたわけではなく、平言俗語で表現しても、文学的、藝術的な句ひの高い句が出来ないわけではないのであります。現在、雅言とされ、上品視されてゐる万葉の如きもその当時の平言俗語であつたことを思へば、平言俗語で表現したから川柳が下品だといふのは当たらないのであります。要はそれ等の平言俗語がいかに適確に駆使されて、その句を價值づけてゐるか、否かないかにあるのであります。試みに今人の句から抄出して、所謂上品な句は相當に沢山あるのであります。

夕櫻とんぼがへりがしてみ

たし (路郎)

月見草地球は丸いものらしく

(かほる)

涙涙なぜにまろさか

(愚陀)

月あれど山あれど君はなし

(善哉)

かなしみ多く夫人は歌をよみ

ならひ (丹路)

内容的にも修辭的にもこれ等の句の何処に下品さが見出し得られやう、しかしながら、川柳のやうな、かすしな句品でないことも云へるのであります。それは何んど云つても、川柳の構成が平言俗語であるというにありまゝです。ある人の著書を観くと句品というものをモラル的に解釈し、風儀の悪い句をつくらぬやうにと述べてゐられるが、句品を藝術の立場から論ずる時にはモラルの問題ではないのであります。

はつと重みのかゝる芥川は、業平が二位の後を奪つて、落ちのびる際、芥川を闇にまぎれて徒歩渡つた時の句であつて、モラルの面から申しますと、風儀のよくない

句、即ち下品な句だと云はね

ばなりません、この句などは藝術上官能的な句として敬

服に質する句なのであります。

川柳の多くの現代性の平言

俗語で詠まれ、時代性をハツ

キリ描出するのであります。か

ら勢ひ、貴族趣味、古典趣味

の表現とならないのは寧ろ当

然なのであります。それだけに、一面句品の問題を超越して、

社会性のきびしい批判的な

句によつて、川柳のよさを発

揮してゐることをその特徴と

して見落してはならないので

あります。

中には雅言で詠うことによつて、句が上品になるものと考へてゐる人たちもありまゝす。それは徒らに古語のまじりに眩惑されてゐるに過ぎなくて、それ等の人たちの句の多くは俳句の如く足を踏み入れてゐることに氣づかないのであります。

校門より久し六月の空晴れぬ (蟬古)

が、それでありまゝ。作家は

医学博士 長谷川成一先生著

發行所 大坂市住吉区万代
西五丁目二五番地

不朽洞

人間のか類と世態

著者は世俗を超越して眞に人間的に生きてゐる人。川柳は「徹と称し、一君などは悪貨の一人流行るべし」と金儲けにキユ／＼たる医者仲間を諷刺する人。その奇骨、その柳眼が凝つて、戦慄を余所にこの快著となつたもの、一読を驚む。

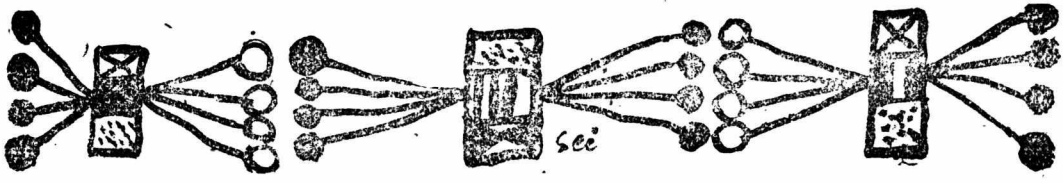
(定價五〇円 千六四・振替大坂三〇三九二番)

上品な川柳を作つてゐるのかも知れませんが、私たちはこれを川柳としてうけいれることが出来ないのであります。こゝに曼珠沙華を詠んだ二句がありまゝので比較対照して見ることにいたします。

一周忌かしこもこも草萌ゆる (霞乃)

曼珠沙華電車を汽車がおつかける (曉童)

前句は感じも出てゐるし、上品でもあるが、川柳味は稀薄であります。一步踏み外つすと俳句の如くものになりまゝす。後者は同じく曼珠沙華を詠んでゐる句ではあります。が、人間味がウソと躍動してゐる、川柳としては前者にまさるものがあります。しかも前者に比して遙に下品だとは云へないではありませんか。これからの川柳に句品のレヴェルの高いことはのぞましいことではあります。句品が高いことによつてのみ句が秀れてゐると云う錯覚に陥入つてはならないのであります。



麻生路郎

さくまようせんとあかんと蛙切り
蛙切りへ空の碧さがしみ込んで
蛙切り子はアメリカで皿洗ひ

註・蛙切りは伊賀方面で百姓の冷称

心の沙漠 恋はむなしき

機械的に夕刊を誦む夫

新聞社の扉を排して戦争未亡人
曉に祈つた夫いとしがり

○

大阪市 武部香林

春麗ら犬と話して見たくなり

安月給憶面もなく子をつくり

知り合ひか巡査は米をどがめざる

金塊のやうに百姓米を抱き

人の恋眺めて儲けはる喫茶

ドン底に來て抱きしむる子が四人

月末やきつちり隣り揉め始め

客は皆グチャ／＼と喰ふ紙芝居

許された國旗の母に似る

母と來た映画いきなりキツスする

團琢磨程の月給でストライキ

霞乃奥様に感謝

關病の極意を聞いて梅白く

横浜市 福田山雨樓

今は亡き兄が入学の年となり
梅千婆五郎扮したような声

池田市 戸田古方

清貧の住めぬところに住んでゐる
判一つもらう用事にお菓子函
佛さんみんな肯定してる顔

布哇 内藤草一郎

男裝の方が本當の顔に見え
フラダンスアット云はせたタイピスト
宝石の魅力最後のものと替へ
紙屑を捨ててが如く首になり

氣を若くするのよ派手なドレス着る
捨てられた年が仲居に身を落し
更生を己に誓ふ退院日

女房に孫をゆづつてつけさせる
橋に虹かゝり絵になり歌になり

いつそ又皿を洗ふて暮らさうか

尼崎市 水谷鮎美

卒業の娘に植木鉢見直され
唇朱き許嫁など如何せむ

女医さんの日記良妻賢母論

自轉車で來る女医さんは花を持ち
奥さんと芝居話に餅が焼け

新婚の夫婦のようなくちげんか

大阪市 福田妄夢

四疊半ひと間へまたも生れたり
ふり出しへ戻つたばくは二十八

奈良縣 西垣錦風

世帯染みたねと妹の手を握り
朝寝した蒲團自分であつたむなり

感狀の額が裸体の絵に変わり
インフレ一旦那妾に借りが出來

物納の別荘の櫻咲き乱れ

大阪府 川村好郎
参考のため裸レビユーを親たと言ふ
道問へば女一足後へ寄り
いゝ妻よノートちぎつた文なれど

岡山縣 浜田久米雄

右腕がつかまれているすりの夢
税金を拂つて春の陽を感じ
差押え來たか道理でもの云はず

平塚市 木村孤浪

こゝに芽があつたあつたと水をやり
茶だんすを試く氣になつた春の宵

苦笑ひ靴の修繕ことわられ
宝籤プロベビリテイの講義もし
悠々と制服汽車に近道す

あの大火今朝新聞に五六行

布哇 築山快夢起

白粉と紅で兎に角らしく見せ

二万弗錦衣婦郷も夢であり

横顔へフト思ひ出す古い借

人前で入歯をはづす齡になり

かしこくも人間なりと御宣言

大所府 西尾 菜

靴磨きオヤ／＼指輪はめてゐる
ピース一つだんがと家主のこぼすこと

大牟田市 高田抱逸

二日酔妻に急所を又つかれ
極左派に会社急所をねらわれる
自選してボス重役になりすまし

入試門こゝにも効いたボスの顔

夕立のやうに泣くのが子の取柄

還暦の夫へ後妻又孕み

大阪市 市場淺食子

子供賣の記事寒々と妻と読む



歳どつて誠とは死ねと言ふ謎か
耳遠く愈々父の長壽なる

オーパーも靴も年期が来てしまひ
割箸へやつぱり金はあつたがいゝ

方々へつけた手帳の慌てよう
名古星市、吉田 水車

雨だれのように新内流し来る
打ち解けた証據に彼女歌い出し

オフリミット廊の春の灯がこぼれ
念押せばそれはアツサリ千單位

持参金は無いが免許は裏千家
大阪市 須崎 豆秋

大藏大臣になれそうもない酒の量
春春のほこりか帽もひき裂いて

肺になるから好きなことさしなはれ
お香この匂ひもしてる折靴

出産届ベタ／＼と印が要り
大阪市 正本 水客

来るが早いか産婆坐すべきとこへ坐し
取り残されたように竹やぶ川に沿ひ

伊賀焼の店へ四五人旅らしい
松葉蟹裏日本の潮の色

老夫婦子供と別な店を出し
こんな手もあるかと拘摸に感じいり

エチケットを習ふ四十の成上り
子に甘いことで嬉しいけんかして

花道の七三から呼び戻し
外人の大きな靴にある親しみ

人世と言ふを荒れたる掌に感じ
喰ふためと思へば化粧淋しいね

もう春が裾まで來てる芽を見つけ
女みなどれもみだらに見える日よ

男なら捨てゝやつたと何故言ふぬ
お針なぞ存じませんと昭和の娘

佛壇の艶へ吸ひ込まれる思ひ
花嫁の鍬が近所の眼を集め

病床吟
奈良縣 尾崎 方正

春や春先づカーテンの塵拂ひ
春ですよ足袋脱ぎ棄てゝ爪を切り

節分のお化粧結だけが褒め
女房談議にや／＼と居る亭主

古道具屋に三味佗しくも飾られる
ぶしつけへマダム眉毛を寄せたさけ

ワンダラス水は孤獨の味がする
大阪市 菊沢 小松園

二十七日手術
肛門の手術も神の名で祈り

安靜生活
未だ瘦せる余地があつたを不思議がり

動いてる世間の音が床を揺り
安靜の床へ税金督促状

叱らずに子供育てる本は買ひ
青春を肺の野郎が捨てさせた

病人だから大目に見てくれた口惜さ
肉体の磨滅する音よ咳々々

ぐら／＼とくればお前は此の行李
大阪市 橋本 美奈子

私服になると何か忘れるうちの入
駅員の親切新聞記事になり

うがひする度にくもの巣を見つけ
出雲市 尼 緑之助

米村あんな氏の死を悼む
四十年句集と共に逝きし君

満たされぬこゝろ日曜の夜の煙草
大阪市 水谷 竹莊

余技見せてから平社員見直され
世話好きの妻へ夫はほつとかれ

忘れなよ第二の母の出來た日を
長男のひょうきんまでも僕に似る

甘やかしてはいけませんと妻きついこと
よりによつて僕にラツキーレター來る

義理の仲／＼でと言ひあつて
恋すてた僕だ靜かに雑誌読む

若き日の夢はやぶれて子をせおい
山紫水明薪はこゝから伐り出され

空いた汽車寒むい車へ殘業組
夕焼けへ再起たゆまぬ石を組み

大臣としての魅力に迷わされ
昭電事件に寄す

公約如何
公約のお手並汽車が又上り

服の無いのを口実に義理を欠き
酔が醒め駅のベンチに俺が居た

税務署へ化けて出たると廢業し
いゝ月が閑屋を詩人にさせて居る

新婿は電話もキッスの音をさせ
七戦犯処刑

悟道とは南無阿彌陀佛と云ふ事か
未だ雛へもう卵箱備へつけ

妻と子と食えば千円も安し
神戸市 大鶴 喜由



貴嬢の氣はこれだとあざみ指し
夢がふと教へて呉れた好きな人
よしんば嘘にしろとんがつちや駄目
許して知つたその子その妻
御承知でもあろがとこれもことわる氣

大阪市 吉田斜水

酒の味忘れて風邪を引く寒さ
裸体画へ魅力も盡きて春が来た
冬逝きぬ鋪道に恋の流行歌
賣つてやる氣持が抜けぬ配給所

茨木市 下山清潮

春雨にひとり濡れてゝもの足らず
大阪で育ちのんびりした言葉
海の音港も今日は荒れそらし

大阪市 土井文蝶

籍は大阪花の吉野の仲居さん
百円紙幣もう駄菓子屋も驚ろかす
教育がないとも言へず引辭説む
紙屑屋物の値上りくどく聞き
法善寺昔の湯氣をなつかしみ
朝鮮語巾を利かして闇をやり
ついでですお互ひですと門を掃き

布施市 糸本醉月

泣く子と税務署には勝てぬ世か
鼻低く夫姑に良く仕へ

奈良縣 白牛奇朗

我が首の細さが軍鶏にさも似たり
吊皮へ何んと毛深いお嬢さん
電球をわればいくらか胸がすく
教材の寄附へ素直な老夫婦
移轉かと思れば滞納差押へ

岡山縣 山分北路

茶話のハッピーエンドもの足らず

卒業の近きを髪も延びたまゝ
白足袋の大人に見える卒業日

瀬戸市 鈴木みきを

母の留守派手に砂糖を入れました
子が病んでリンゴのかへる金が出来
この腕で税金も出し米も出し

滋賀縣 藤田わたる

銀狐卷いた保険の外交員
叡山の枯木で御飯炊いてます
相談欄俺によく似た事が有り

奈良縣 西辻竹青

遺児とまた学藝会へ未亡人
自重論妻は遊んで居れと言ふ
女房にすまぬお客の日日続き

吳市 林野甦光

えりあしと着物の柄と足袋の裏
恋も良しわたしが弁当こさへます
聯珠屋の並べて置いて貰にする

京都府 間島青丹子

春の海いきなり子供足をつけ
スナツプの横の女を疑はれ

名古屋市 山林正思

作止めの立て札うらむ老夫婦
金策と知らず途中の長話
呉々も御世話たのむ年の勢

大阪市 上田春柳

宮参り男でつせとみせたがり
花吹雪春は西から東から

布施市 森下愛論

相像をたくましくして妻すねる
さゝやかな生活ミシンのリズムよし
カストリの酔に自嘲の哀れさよ

大阪市 大西柳堂

新学のあるきた雑誌読んで

受附が留守を使つた好い天氣
大阪市 渡辺孫拙

意外にも悪童の噂が子なり
PTA悪童談議がいつも出る
鳴る鐘のない浴槽でのど自慢

大阪市 麻生梨里

ヒスと云ふ戦術もあり女は強し
似てゐると鼻の低さも指適され
おどかしてやりたく自殺してみたく
大金を捨てゝみたいなビラの様に
採用試験ちとからかつた事も云ひ
淋しいと云はず詩集をめくる音
こそばゆいお世辞へおじぎするばかり
花持つてロマンチックな見舞客

兵庫縣 鳥山一步

淋しさはわれに乏しき酒の酔
看護せば病妻酒を飲めといふ

金沢市 安川久留美

風の唸り昔に戻り草の崩え
佛教の学校を出てもう孕む
有名になる頃墓は欠けていた
中風になつて設けの席遠し

松山市 前田伍健

昔むかしから飯釜のふく快ろよさ
就職難彼は社会のこぼれものか
人間に家なし小鳥巢を作り

大阪市 橋本緑雨

昇降機夫の肩をつかむなり
学童が一人たりない旅のこと
折腕うそ偽りを包むもの
古着屋は錦紗の陰に坐つて居

神社の復興攝社ほどになり

樟に梅添へてうれしい許嫁
杉樟の香りよ上戸ならずとも
樽すえて昔の素性かたらない
櫂のふた大工仕舞の日にこさへ

兼題「新茶」 上田翠光選

施待の新茶の味で買はされる
親善の新茶を托すエヤメイル
ふるまふとは新茶がにほふ頃なる
逢に行く母手土産に持つ新茶
茶ごころの朝は新茶へはづむ声
いゝ焼の湯呑の新茶がほろくし
肥厚性鼻炎新茶の香を知らず
早出しが自慢新茶の荷を閉み

席題「当日難題」 武部香林選

香具山の眞清水もほまお湯加減
見合のよこさかしこまる
お茶の席
お流儀の違ふ野だてへ面喰ひ
香久山の春霞なり立ちつくし
天香山春みたい顔が並んでる
香山山は霞に暮れて路を問ひ
大和路は寺から寺へ梅櫻
奈良文化培ふ一つ蓮合寺
裏表お茶の話もはすむなり
御手前の娘に春の風が吹き
耳成を指さす先を蝶が舞ひ
草の名でもめて吟行面白し
さあ春だたんばほすみれん草
春のごか何やりに立つ煙り
野だち茶のよりごりご娘さん
野だて茶へ小鳥がチ〜と鳴いてる
波々廻の木占い御事聞〜眞晝
紅椿旧家の庭に影深く
野立の茶さつきの新芽竹にさし
興無窮昔春さ〜とふる替か
花曇り香久も歎俯もれむたそ
税金のことも忘れて蓮合寺
洗濯屋〜が香久山かと思ひ
香久山の山裾園の家も建ち
香久山の霞の中に自警園
香久山の野立のお茶へすべり

瓜 平
水 客
白 柳子
同 欣三
香 林
良 子
文 蝶
同 鮎美
白 柳子
翠 光
春 柳
系之助
翠 光
鮎 美
良 子
同 方正
同 没食子
竹 莊
同 栗 葉
同 錦 風
同 豆 秋
同 水 客
同 紅椿
同 野立
同 翠 光
同 豆 秋
同 路 郎
同 香 林
は次号各地柳壇(発表)

新會員紹介

五月

太田良子	(大阪市)	正
竹莊氏	紹介	
靜岡忠八	(尼崎市)	正
潮花氏	紹介	
岸南柳	(大阪市)	正
白柳氏	紹介	
松井可笑	(廣島縣)	正
柳慶氏	紹介	
松江梅里	(大阪市)	正



青空満喫の吟行

香久山の春

昭和四十四年四月十七日

殺人的人人出

久し振りの吟行へ、眺向きの好天氣だ。第三日曜ではあり、おそろしい人出を予想しながらあやめ池の家を出た。各駅とも花見の客、会社商店の慰安会、それに天理教の団体で殺人的人人出である。

(路風)

社旗の下に集合

上六駅は未曾有の人出で、あの廣い切符賣場が役立たないので近鉄本社の前へ移轉する始末。構内も廣場も人で埋つたので警官が縄張りして警戒する騒ぎだつた。私たちは人に押されながら辛じて「川柳雑誌」の三角旗の下に集つた。九時半頃、路郎先生、瓜平、愛論、緑雨、美奈子、竹

莊、正司、香林、白柳子其他の諸君と私が思ひ／＼に櫻井行へ乗車した。(安 蝶)

蓮台寺から香久山へ

下車した大福は予想外に静かだつた。下車してはじめて先生や柳友と同じ車であつたことを知つた。方正さんが下車してゐられたのでそのあとへ続き十時頃に今日の会場の蓮台寺に入つた。

蓮台寺は静かな、すがすがしい感じだつた。私たちの句会は庭にのぞんだ廣い部屋だつた。兼題の外に席題として今日の「難題」と「アベック」と「村はづれ」の三題が発表されてゐた。席上では短歌会と俳句会とが開かれるのとこの香久山麓では野だての

茶会が催される話。一服すると、本堂の俳画展を見せていただいた。川柳部は廿四五名集つたのでなか／＼賑やかだつた。幹事の上田翠光氏の案内で、一行は香久山へ向つた。(錦 風)

蛇のバツク

香久山はついそこに見えてゐたが、少し行くと、また違つた形で向うに見える。遠くから眺めた天香久山は形の整つた美しい山であるが、近づくとも山裾は幾つかにわかれて出たり這入つたりしてゐる。

みんなは文字通り三々伍々ど春風に吹かれながら、いそがない歩調で行く。小川の橋の上で篠山壽彦君と太田良子さんが立ち止つて土堤の方を見下ろしてゐる。須崎豆秋君も僕も立ち止つて同じやうに土堤の方を見下ろした。

そこには大きな蛇が石垣の繼ぎ目からグラリとブラ下つてゐた。誰かが石を投げた拍子に、蛇はズル／＼と僅かな穴の中に、からださがズリ込んで行く。よく見ると、最後の方に頭がある。蛇は自動車がガレージへ這入るやうにバツクしてゐるのだ。蛇のバツクは誰もが見はじめだつた。

席題「村はづれ」を考へてゐた人たちが「蛇バツク雲」

ストツプ村はづれ」と合作して笑ひ合つた。(路 郎)

野だての茶會で

さて目的の香久山へ登るほどに、山腹の僅かな平地へ幔幕をめぐらし、赤毛布を敷いて「何々流茶席」と云うのが設けてある。野だての煙りが笹の葉末にもつれて霺がけむたがるあたりがまことに風流の極致と云うところだが、頭香の煙りに列んでゐるようだ。

なかに一きわ風流の道を解せぬ一人の絵カキ、天地人の席順もあらばこそ、ツカツカ上座に進んで、どつかり胡坐をかいたが、面々が赤毛せんの上に串刺しの團子のようにかしこまつてゐるのに氣付いて慌てて坐りなおし、前に出された饅頭をほ／＼張つてスケツチバツクを開く。

美人？ の手でいとも慎重にお茶がたてられる。お隣りの客人はお茶をすつたあとで、やおら襟をこすつたり茶碗をこすつたりしてゐる。さて絵カキの番なので、ぬつと手を伸ばすと、美人は「サンキヤクにお願ひします」

と二三回呼ぶ。サンキヤク？ はて何んのことかな……あゝスケツチを三脚に腰かけてしろとゆうんだね。ちようど

眼の前に青竹三本組合せた三脚らしきものがある。これがいい。だが変だね。馬鹿に脊が高くつて鉄瓶がブラ下つてゐる……てな工合いで一向に要領を得んが、前でお茶をたてゐる婦人の顔をジロジロ眺めてから隣の客人に囁く……

「さすがお茶席だけあつてなかなか趣向が溢いね。あの婦人も過ぎるほどじやありませんか」勿体ぶつて大きな茶碗を頂戴したが、中味は底にちよつぱりとはと物足らぬ顔。(瓜 平)

正客が漫畫を描く

総勢廿四五人が一度にドツと押しかけたありさまは、七人の荒大名の故事をつくりだつた。斯んなこともあろうと路郎先生がいささか心得のある人たちが先頭に一絲乱れぬ

喫茶みどり

外食券食堂

上六交叉点西北角

新陣容を整へてのぞまれたのであつたが、瓜平さんがそれと知るよしもなく、ツカツカと正客に坐はり込まれたので、画面は一変して実に面白く愉快だつた。正客が漫畫を

描くとは天下無類の茶席であらう。(錦風)

香久山を説く

こゝで一寸香久山のことを少し述べておこう。香久山は犬和三山の一つで大和平野の南部に品の字のやうに、畝傍山と耳成山と凸起鼎立してゐて、何れも似寄つた大きな形のよく整つた小山である。そして香久山、耳成の両男性が、女性畝傍を争うたと云う面白い傳説もあり、香久山は正しく云うと天香久山であつて、天照大神の岩戸籠りされた処とも記されてある。また持統、文武兩帝の都であつた藤原宮、或は埴安池などもこの山麓にあつたらしい。「百人一首」にある持統天皇の「春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香久山」と云う歌でも有名である。野だての茶会の席から西方二十丁のところに居るのが畝傍山で、香久山から西北一里余のところに居るのが耳成山である。(路郎)

トータンスの香久子

路郎先生の天香久山の話で思ひうかべたのであるが、宝塚少女歌劇の創立時代のこゝと、雲井浪子、大江文子、小倉みゆき、滝川末子、高砂松子、篠原浅茅、天野香久子と何れも百人一首から藝名を採

つたのであつた。天野香久子は今私たちが立つてゐる香久山から採つたのである。小柄であつたが非常にトータンスの名人で他の追従を許さなかつた。今ではトータンスの巧い人はざらにあるが、三十年ほど前で、斯う眼をとちると彼の女の舞台姿が暇に迫つて来るほど印象に残つてゐる。うまいものであつた。美人ではなかつたが魅力はあつた。漸く名声が高くなつた頃、彼の女は失恋自殺をした。(鮎美)

社前の晝食

茶席の席主は当麻寺の中之坊の松村実照師で尾崎方正博士とは従兄弟の仲だと先生から聞かされた。茶席を辞した一行は天香久山神社で晝食をした。そこへ西尾葉氏が、「今、眼が覚めたのかい」とひやかされながら参加された(錦風)

波々迦の由來

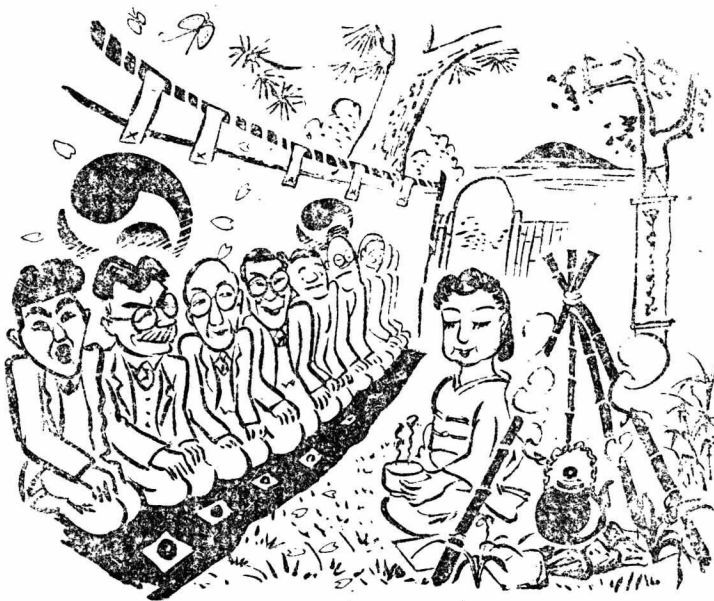
天香山社務所の前の名木「天の波々迦」の由來を路郎師は説明された。太古この波々迦の木を焼いて、鹿の軀骨にあてゝ、その龜裂によつて占をしたとのこと、波々迦は櫻の一種である。(鮎美)

蓮台寺の句會

婦人も三、四人参加された

し、子供を連れての参加は家族揃つてのハイキングのやうでもありゆかいだつた。晝食が済むと、作句慾が頭をもたげて來たので、一同香久山をあとにして会場の蓮台寺へ引返へした。席題を作りなが

しい。しきりにノートに記入される。流石に大家だと思ふ。瓜平氏は景色の写生に余念がなかつた。ほどなく蓮台寺に着いた。軽い疲れを覚えた。蓮台寺の句會は、いつもの



野だて茶會のお客まさ 種瓜平画

ら、引返へす姿は、まるで葬式の野辺送りやうでもあつた。しかし余裕綽々の作家達は相変らず洒落を飛ばしたりしてゐた。鮎美氏などは四五歩行くうちに名吟が出来るら

やうにスムーズに行はれた。そして五時すぎに會を閉ぢた

(錦風)

歸途車窓の櫻

ホントに和やかな吟行であ

つた。閉會となつたので大福から多くの柳人が乗込んだ。そのうちで正司、春柳、吾檜鮎美は並んで吊皮にブラ下つた。車窓から欄干の國分あたりの櫻は満開だつた。車内は道頓堀の某キャバレーのダンスー連のお花見帰りで満員だつた。(鮎美)

樂屋落の句

好天氣で香久山吟行は誠にうれしく、税金のことでも忘れてたのしく過しました。樂屋落ちの句ばかり作つてゐて翠光さんに笑はれました。

お手前をジロ／＼写す瓜平さん

方正さんしびれ切らして句を作り

その時騒がすお手前に錦風子

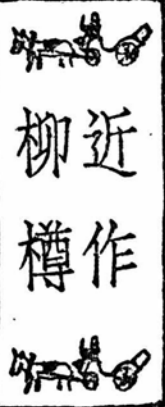
文蝶は杉山流でお茶をのみ

没食子奈良の句會は親子づれ

綜合的文化の集ひ

今回の香久山吟行が奈良縣觀光協會や近畿日本鐵道の後援で茶會の野だてが三席と短歌會、俳句會、川柳會の綜合的な文化の集ひであつたことは、興趣に一層深いものを感じた。

終りにこの綜合的な文化會の企劃にあつせんされた蓮台寺の住職吉原寛樹師に感謝の意を表する。(路郎)



だぶついた服着て過去を思はせる 大阪市良子
 晩酌の量もこつちで加減する 同
 笑つたり怒つたりして夫婦です 同
 えらそうな事を云ふても待つてゐる 同
 満員の電車良夫へぶら下り 同
 奥様に違ひないけど恥しい 同
 夫婦して飲んで明日の風を待ち 同
 待つて居た事を云はずに迎へて居 同
 恋文は番号つけて読み返し 同
 診察を待つ部屋時計寒く聴く 大阪市草
 フト給料思ひ出したら酔さめた 同
 母若き日ありブツクに百々之助 同
 若鮎に似たり少女のバスケット 同
 風呂敷に親子五人が生きる米 同
 未亡人読めない本を賣りもせず 同
 女中の恋あはれ吸殻にも似たり 同
 春よ春京は焼けないだらり帯 同
 四十三ナイトキヤップを未だ捨て 岡山縣七面山
 公約は果すと吉田和服でゐる 同
 忘年も新年もないガード下 同
 防犯の網にかつた署長の子 同
 唇を盗めと言つた赤さなり 同
 父病んで遺産の事をふと思ひ 同
 ネクタイを弛めで酒を飲む氣なり 同
 島に無い物をほしがる風邪の子が 愛媛縣孤峰
 何日か名の書ける子供になつても 同

片言で抱いてもらへる手をのばし 同
 たより無い政府の押した太鼓印 同
 街録のマイクへ不平となりつけ 同
 ダンスホールへ拾ひ手もない靴で来て 大阪市ひさみ
 接吻ぐらい許したげると平氣でゐる 同
 男の嘘女の嘘春の陽はうらら 同
 太陽のなかを手鏡で引かれて来 同
 あんな顔してゝ男を知つてはる 同
 一日の食餌は牛乳二本 同
 水のような牛乳ながらさりながら 貝塚市庸司
 試歩の下駄きつちり母に描へられ 同
 隣またダンス水屋が鳴つてゐる 同
 結婚に破れ看護婦帰つて来 同
 卒業はしたがアルバイトはつづけ 同
 おめがねに適ひ社長の鞆持ち 高槻市丁路
 運動の爲に耕す人もあり 同
 隠れんば茶種畑へ皆隠れ 同
 大阪でこの世の地獄見て戻り 同
 情熱の詩人黙つて呑むばかり 同
 保険屋の話はずして薪を割り鳥取市日満子
 金策へ母はお米で貸して呉れ 同
 女房の記憶に俺がぶつたとか 同
 葬式に間に合ひませんバスを待ち 同
 共産党皆問題にして叫び 熊本市さとし
 税務署が立派に出来た恐しさ 同
 女事務誘へば恐し飲む氣なり 同
 雨もりもテンボあるなど所在なさ 同
 あの口が思ひがけなく人を褒め 八代市斗四翁
 薄情な目つき小金を貯めてゐる 同
 たゞ義理で来た見送りの闇ばなし 同
 吉田さん白足袋税は如何でせう 大阪市花村
 焼跡に美はしきものの冬の空 同

榮轉の父は任地で一人住み 同
 デモへ狩り出されみちな水つ涕 長野縣柳
 占いにはにかむ若さつけ込まれ 同
 罪の子へ女は意地をまだ続け 同
 銭湯の刺青の側空いてゐる 今治市巖
 女湯は小兒科よりもよく泣かせ 同
 やゝこしい社説も読んだ待ぼうけ 同
 物思ひピアノの艶を拭いて見る 兵庫縣花美
 春の陽に猫は世間と別に寝て 同
 憲法が変り女もまた変り 同
 母の肩もめばどこやら嫁らしく 神戸市花代子
 恋なんて娘の遊び道具らし 同
 箸をもつ指は男の手もつかみ 同
 濁酒が出来たで結つた高島田 日田市独活
 恥しい落書も有る十八九 同
 差押へされてダンスがじやまになり 同
 蛇の如きくど子に孕み 岡山縣弓削平
 出張の宿木堂の偽をよむ 同
 銭湯で会えばライバルやせて居り 同
 トラックは牛を抜くとき黙めき 愛媛縣吐平
 管轄の違ふところから来た眼付き 同
 見付かつた罰汽車賃と米の損 同
 空くじの様に女は捨られて 岡山縣笑泉
 精農の牛の歩みに似た暮らし 同
 ガード下も元日と云ふにはひ 同
 熟れて落つ木の実のミミ恋を得ん 今治市國彦
 波頭白きが悲し待合所 同
 その中のつかねし髪忘れられず 同
 廻るとこあつて女教師和服で来 今治市松花
 心理学の通りに泣き出す女学生 同
 マルクスはありませんかど十八九 同
 疎閑地の映画は二年程遅れ 高知縣元馬



染替へた服へ櫻の花が散り
同 弟の英霊風呂敷でぶら下げる
同 國立公園

町長が指し示したる春の島今治市ベッ
描き眉の女マツチを役けて貸し
同 役所の娘仕事始めに火をおこし
同 今買へば二万円よと雛人形尼崎市利

宿直へ相場は知らぬ炭をつぎ
同 痛い云へばそれ虫下し
同 潑刺と冬にいどんだ苗の芽大阪市若

毛糸賣りチラリと見せた色の好き
同 焼あとにころんだまゝの石地藏大阪市梅
家柄がどうのこうのと裏切られ
同 牛買つた事まで税務署知つて居り岡山縣凡

羊 麦の値がどうあらうとも麦を踏み
同 アメリカもロシアも好きと云ふ女岡山縣夜詩絵
七十の皮膚にも春を感じたり
同 榮轉へ給仕内心うれしがり兵庫縣天

平 少しづゝ左へそれる青年部
同 他力本願政策ビールの泡の如石川縣光
潔白を声明しても逮捕状
同 ゆり起こす前に寝顔をつくづくと今治市一

風 酔ふことを知らぬ女をかい抱き
同 親切に甘え過した事を知り大阪市葉
光 二階借りそれでも甲斐性ある方で
同 ベットからおかどみ程の月が見え姫路市燕

子 出張先男子安産言うてくる
同 スマートな病院食堂に縄のれん大阪市草
石 くらがりて揺刺りのこし判をつく
同 下車駅が近づいてくるコバンクト下関市九呂平

争議解結祝宴に赤い唇
同 片意地な損ばかりする雞を飼ひ新居浜明
窓

病人の方が時局をよく論じ
同 未亡人二号にならふかと思ひ和歌山宏
方 仁術も忘れ食うべく生きんとす
同 わが夢を繼がせるつもり子を育て今治市文
庫 政令を小馬鹿にしたる店構へ
同 むしろ我けものなれかし夜の底今治市伶
人 風消えぬ木立の家に君と寝ん
同 ぼろ／＼のおしめを干して恋も布施市勢
峰 虫さえも元気で生きてゐるものを
同 ボマードの匂ひを縫ふて課長席三原市正
一 ハットするバーマの降りた田舎駅
同 避妊薬すでに達者な子が五人小松市茶
佛 通訳の要る大臣はみくびられ
同 目的があるのか春の街の雑踏宇都市粗
影 追憶の花とは弱き僕なりき
同 掛軸もしげ／＼眺め旅の宿大阪市野
草 熱弁になつて出てくる國訛り
同 可愛い娘テーキのとしをのぞきた大阪市一
昌 大尉とか昔の話ひとくさり
同 よく肥えた犬を税務署見て歸り大阪市五
郎 丹前を着れば坊やを預けられ
同 結極は盲判だが勿体振り大牟田風
浪 失言の釘を一本打つておき
同 看護婦の愛染かつらに負けぬ恋貝塚市千
舟 家政婦の息子も同じ胸で死に
同 ソーダ水映画見ようか踊ろうか横濱市万
年 皆焼いた愚痴がまた出る雛祭り
同 それなんだがネどき出す生活苦佐賀縣えい
をブラカード冷たい風を押して行き
同 茶を汲めば課長は一句書いて見せ兵庫縣薺
花 供出のうらみを受けて榮轉し
同 婿鬼の電話素顔のまゝでかけ岡山縣久米女

お歸りがなくて素顔の目が続き
同 接吻と貞操別なものらしく大阪府K
子 お家ではいゝ娘外では噂の娘
同 仕合な日だ文からは焼きませう兵庫縣花
子 摘草の春だ貴方と呼べる春
同 神信に未來に望み持つ病ひ上田市一
行 にはどりの庭の廣さにのどかなり
同 うまいこと嘘をつかれて見合ひ姫路市和
水 食ふ話をよく知つていてやせてゐる愛媛縣旭
童 女性群血液検査など燥ぎ東京都武
雄 麦をふむ影が田圃の外にのび岡山縣半
仙 税務署員けんかの様な話し合ひ岡山縣正
州 焼酎の事で朝からもめて居り岡山縣運
平 食うて寝て肥えて闘病なりとかや神戸市六
々 小菅行きの見送忙し民主党東京都蛙
太 流行歌音痴のくせに得意なり兵庫縣こよし
暖冬異変さま見ろいスキーヤー大阪市太郎作
決心の様に女は何か買ひ今治市逸
童 太陽の思わししばらく忘れとき愛媛縣曉
間髪を入らずグローブ物にする岡山縣茶
々 失業へ同権などは邪魔になり滋賀縣滋
郎 更生の春へ身内は泣いてくれ九尾市浪
二 微熱にも寝てなさい／＼と二人子大阪市葉菜子
日曜日昨夜の雨で朝寝する大阪市桃
村 行政整理首の輕さを如何にせん香川縣迷観子
京阪神ストしらなんだ婿鬼日堺市不二鳥
球磨川下り竿一本でいい暮らし大牟田煙
牛 歸る迄で待てす途々マンガ本福岡縣柳
城 買いたくもダイナミックで五千円大牟田平
人 握手だけでも念を押したのに兵庫縣薺
四 人任せでもよいのなら見合する大阪府薺
安 病みばうけ未だに夢は捨てられず岡山縣梯
梧 新築へ祖父母の履歴語られる新居浜義
柳



放送された川柳の村

前田 伍健

愛媛縣越智郡津倉村と云つても、何の姿哲もなく、そんな村が在ったかと思ふ位でせうが又あるお方は、うんあの津倉かどうなつくお方もありでせう。今治港からボンボン船で約一時間、今治港のすぐ前に見える大きな島、この大島の中に在るのが津倉村であります。即ち津倉浦、龜山、宮津、大山の五ヶ村がこの大島で津倉村には大島を纏めた大島高等学校があります。まあ一つ詳しく申上ると毎年旧三月二十日二十一日に数方の人が遍路姿で出かける大島四國……島四國巡拜の地で、本年は四月十七、十八、十九日に當る伊予の國で春の行事で最も大きな遍路市弘法大師登仰の島めぐりの大島中でその中心をなす津倉村と申せば、成程さうかとお判りに成つたと存じます。この津倉村は産業、教育其他各方面に傑出して居ります事は勿論ですが、風光にも、すぐれており、田村博士の國立公園指定地内で、この大島五ヶ村の八景を申し上げますれば、

八幡山の眺望、龜老山の遍路市、能島城跡の夕月、武志の夕映え、中渡の御潮、津島の帰帆、鶴島のいざり火、念佛峠の雪景色など山と海と史跡……史跡は伊予水軍の本拠であり吉野朝史の村上義弘公の菩提所でもある……津倉の八幡山は村に優れた往昔の史跡で昭和十六年に文部省より名勝史跡地としての指定をうけた地であります。津倉村は昔は京の公卿領で後織豊時代は村上領と成り徳川時代には今治藩の領地でありました。それはまあ惜ておきまして津倉村が全國中特異の川柳村としてのお話を致しませう。今から約四十年前當村に村上源氏さん木寅子とも号して居ましたお方が、当時海南新聞の川柳壇選者をしておられた窪田而笑子先生の出しおられた「媛柳」と云う川柳誌と結びつき、自然諷詠より人間社会諷詠である川柳に着眼して村の青年、特に婦人層を呼びかけたのであります。津倉の婦人川柳團は當時の川柳界の驚異と羨望的であり、

簞りんどうと云う機關柳誌まで発行して、それはくすばらしい勢でありました。今は婦人川柳人は珍らしくありませんが當時は、俳句の盛んな、伊予地として文学の下積であつた川柳に婦人が多数参加した事は異様であつたのであります。その時代の川柳婦人はもういゝお母あさんに成りお孫さんのあるお方もあります。こうして津倉村え川柳の種は蒔かれまして、村上源氏さんの功績は大したものので、島四國五十二番札所附近へその墓所を示した建礼があるのも、川柳村として、うなづかされる次第であります。源氏さんも、而笑子先生も、故人であります。源氏さんの時代の川柳種は盛衰の年月を経てきて今日は全國的にうなづかされる的と成つた川柳村へと成長したのであります。只今の村長さんは本名で申上るより雅号で申上げます柳原三多楼さんで、村長さんに當選された時、「公僕と成つて見直す村千戸」とよまれました。洵に頭の下る句であります。供出に納税に群を抜く此の村の長たる三多楼さんは栃木山……今の春日野親方はヘカンナを何程か掛けたようなタイプのも、どつしりした、そして溫和玉の如き村長さんで、川柳はいゝ社会人を作る學問であり川柳の中を通る

のでなく川柳を中へ通す……川柳は拙くても、人間を作る學問の川柳を提唱して居るお方でありまして、同村の公民館で女子青年團に十お嫁入りにも川柳の心を持つて行きなさいよ、良識と世間を知り自己反省し順應して行く文学として川柳はいゝものであります」と説かれました。全くその通りで話の泉と二十の扉とトンチ教室と社会の窓を一つにして四つに除したような川柳知識は津倉村の川柳傳統と結合して役場も郵便局も製塩場も青少年團も川柳に興味を持ち、寺もお宮も川柳の奉納額で満ち、堅いお役所の督促状や通知状にも、あの圧迫するような標語でなく川柳で溶け合う氣持ちの一句が村全体に廣がつて居るような次第です。この村のこの川柳原動力とも云うべき方々は渡辺曉童さん藤田不二太さん、小原子穂さん、矢野ミヤコさん、其他沢山の中堅人物の方々が藤田さんは村の製塩場長さんで川柳心で沢山の使用人を包和して終戦直後のあの人心動揺スト流行にも微動だにもさせなかつたお方、曉童さんは川柳の中からお産れた様な熱情家、子穂さん、都さんも之れ又た劣らぬ川柳熱心家で、村には元陸軍中將の小原さんなど同じく川柳研究家で、ウチャ

する程川柳人が居る津倉村であります。川柳を研究し川柳を利用し人口の何分の一が川柳有縁の人々云う程でありますから川柳村と称されるのも尤もであります。村の本屋さんで扱つて居る川柳の雑誌はいろいろで毎月百冊以上と云うのであります其の普及程度を御想像下さい。試みに村の小、中学校生徒さんの川柳を読み上げて見ましよう。

指切りをしたくない我が心
貝がらが散歩して居た山の上
渡邊圭也
渡邊久司

血圧降下には

アーグレミン

血圧アクトホルモンとアミン塩酸

山之内製薬

登校へ朝の雲雀がいない
病床へ母の情けのヒヤシ
村上光枝

婦省の子洗濯ものを土産にし
村上ユリ子

以上五句を見ましても文語体のむづかしいものでなく平明体の生活状態が少年少女の心を通してよく現はれて居るようです。津倉村の川柳は自然隣村えも影響して龜山村の高龍寺の和尚さん(民生委員)なども大いに共鳴しておられるそうです。農業に漁業にお花にお茶にお裁縫に労働に皆な川柳を活かし川柳を通して生活を明るくする津倉の川柳村たるネライそれを保育発展させて行く村長さん始め其他先輩川柳人の氣持がよくうかわれております。川柳に限らず俳句でも短歌でも何んでも趣味を生活に活かして行くこと云う事は大切な事でありまして津倉村が一戸人口四千五百の中にも平明な誰れでも判るこの川柳を反省順應の學問として或は修行の一つとして取上げ活かして居る訳でありまして、農民祭にも川柳脚本で一幕出す利用活用ぶりであります。

掴んだ村でありましょう。平和な村、文化の村、そして川柳の村津倉の話……デワ此辺

かくて桃源の夢は続く

—— 宇井無愁の川柳非詩論に感じて ——

石原青龍

宇井無愁氏の「川柳はユーモア文学の一種」と題する「川柳」新巻号にのせられたエッセイは、たいへんな文章であるが、今日(三月初)まで他柳誌に反響の無いところを見るので、まだ廣く知られていないのではないかと思う。「大へん」といふかと思ふ。それが川柳以外の畑から起つた「非詩論」だからである。「川柳は詩ではない。形式は十七字でも、冷静な知的な客観的観察から生れた一つの批判をふくんだ散文である」(宇井氏文章)

この快刀乱麻を断つて、い、喝破に、今日の川柳家はどうか、くしないではおられまい。おそらく「詩」を最上のものと、し、それ以外に川柳の立場をかざることは無いと考へて、いる彼等事大主義者たちは、川柳が散文だと言われて、高い処から突き落されたようなブツカケられたような氣もちに襲われ、また「絶大な侮辱」を受けたようなさく、かく

で終りを致します。(昭和二十四年三月三十一日、松山中央放送局より放送)

「川柳性」よりも「詩性」を重視する方向に進んでいる者がある。この派の立場はもはや別個のジャンルに轉向したのだから、「川柳」と名のついていても、實質上は川柳でない。彼等は他に適當な名称があれば「川柳」の名を棄てることを希望してゐる。しかしこれは今川柳界から見れば極めて少数であつて、大勢を支配するには足りない。問題はそれら少数の「立場を異にする」者以外の大多数の川柳家が、川柳をあくまで固持しつゝ、それに「詩」を求めようとしてゐる「徒勞」である。彼等の「詩」を求め下心は川柳が下品なものであるものとして社会から不当の取扱をうけてゐるところから脱れ出ようとするところから、それが、何故そうした徒勞をやめて「散文」としての川柳の向上進歩という正道を歩むことができないのか、考えると実に不可解である。「散文」としての川柳の向上進歩を求めるポイントには、宇井氏が古川柳については指摘した欠点——すなわち「批判と諷刺が低俗猥雑で、いまのわれわれにあきたりない」ということへの自覚と改善とにのみあるのではない。換言すれば現代川柳を高度のものに向上せしめる道は、古川柳の低俗猥雑な批判と諷刺とをそのまゝ踏襲するエビゴ(もちろん文化人)の感覚にふさわしい高度の批判と諷刺とを求めることにある。それ

だけで可いのであつて「詩」などは求める必要が無いのである。ただよく常に強調しているようにその表現効果を適切に、またよりよくするたために修辭上の「詩的表現」を必要とするだけである。(この一見ムジユンしたような「川柳は詩的表現を用いた散文である」という規定を理解しなければ、進歩向上を唯一の目的とする川柳非詩論は分らない)

さて、このように言つては來たものの、今日の大多数の川柳家の作品を見ると、觀念的に「詩」を標榜してゐるだけで、それは少しも實作に現われず、現實には非詩作品ばかりに終始している。しかもその大部分が古川柳のエビゴ(ネン)にすぎないが、古川柳にも及ばぬ低俗平凡な作品である。宇井氏はそれを「いまの川柳の常識的でコンヴェンショナルでなまぬるい表現」と指摘し「柳樹の無名の雜筆

品質優良

先 シン
ン ヒ
ベ 針
セ ム ク リ ヅ プ

立川ペン先株式会社

上野市

ちの方がはるかに自由で奔放な精神をもつていたかにみえる」と言い、また「彼等のさうわれない批判精神は少くとも今日の川柳作家の誰よりゆたかでヴィヴィッドであつた」とキメつけている。実にこのような批判はつとに川柳家の内部から盛に起らなければならなかつたのにかゝわらず、彼等はそうした自己批判をするだけの能力も勇氣ももたなかつたのだ。たまたまあれば上記の如き見当ちがいの「詩」に活路を求めて「川柳否定」に走るだけである。しかも大多数は現状に満足して互いに「テング」をひけらかし、こんこんたる「桃源の夢」を見つづけるのである。いま宇井氏のこの「大へんな文章」を読んで、はたしてそれに奮奮するだけの氣力をもつものが何人あるだろうか。

ある。だが、今日の川柳家に作品の批評を期待することは「ピクニにキンタマを出せ」ということよりも困難である。なぜならば、批評は必ず欠点の指摘をともなうからである。今日の川柳家の「テング性」は自分の作品を批評することをタカツの如くいみ嫌ひ、その批評者を仇敵視するといふヤバン極まる感情に支配されてゐる。だから、「社交」をモットーとし、同人ないし誌友あるいは会員の減少を恐れる川柳家はそれをタブウとして、ただ「佳作」のなかまばめだけしかやらないことにしている。またかりに句評を許すとしても、自信を以て適切有効な批評をなし得るだけの人材が無い。かりに人材があつても、それを載せる雑誌が無い。柳誌の経営者あるいは編集者は、このタブウを破るだけの勇氣をもたないからだ。例外として柳村寺発行の「川柳人」があるが、これは今日の大多数の川柳家とは無関係である。少なくとも「川柳」「番傘」「きやり」「すげ笠」といつた柳誌が、足なみをそろえて句評を盛にするのでなければ、この問題の解決は無い。〇を幾方幾億あつても結果はいぜん〇にすぎない。今日の柳誌はその〇をなすだけ多くあつめようとしているのだから、ばくの言うような句評をのせることは〇の集積にさしきわりがあるののできない相談である。かくて「桃源の夢」は続く。(四九・三)

川柳千生瓢箪 (下)

太閤の馬印

阿達義雄

文祿元年には、秀吉自ら肥前名護屋に陣し、宇喜多秀家を総大将、加藤清正・小西行長を先鋒として朝鮮に兵をすゝめることになつた。だが、この出兵を、忌む者が諸侯中には多かつたらしく、諸侯中には秀吉の船頭與治兵衛をして、秀吉の座船を沈めようと図つた者のあつたことによつても之が知られる。

與治兵衛は瓢箪海へ蹴つ込む氣しなり
下の関與治兵衛海のか、(七七編)
後の句によつて考へてみるに、この與治兵衛を反戦論者の手先きと見做して下の関に於て獄門にでもかけて、渡航に氣の進まない反戦論者又は不平分子を、威嚇したり

麻生路郎著 水武書房版

川柳研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウシチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはなんなのか」から説き起して收むところ三十七講、平明で親切で、初心者本書を編くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價 一〇〇円 送費 金三〇円
取次御注文は 大阪市住吉區西五丁目二十五番地 水武書房 大阪七五〇五

川柳雜誌社

戒めたりした、といふ様な話が傳つてゐたのではあるまいか。

朝鮮垣はひやうたんて (三三編)
らりに成り (八一編)

朝鮮垣はひやうたんて (三三編)
らりにする (九一編)

「らり」は「乱離」つばい
で、「らりにする」とは、散々台なしにすること。文祿の役のこを瓢箪の蔓が延びて

朝鮮垣を押し倒してらりにしてつたたと比喩的に表現したものである。然し、結果から考へてみると、らりになつたのは朝鮮垣だけではなく、瓢箪そのものも大分蔓や葉がら

りにされて、やがては、松風に吹き飛ばされ徳川におし流されるもとなつたのであつた。

慶長三年八月、秀吉が世を

後事を托された前田利家の死

多くなり、家康と共に太閤に

後事を托された前田利家の死



選歩八西大 張出 吟題課

出張い先き先きにある女の瞳 元馬
 一日を秘めて出張中に入れ 砂川
 寝台車で出張をする儲け口 葉光
 出張に新婚氣の森がられ 同
 出張の天氣予報を聴く夜寒 同
 出張所汗でさがした露路の奥 室久
 出張隅に葦盤も備へられ 同
 出張旅費で土産も提げる腹 同
 寒空へ出張をする歩が澄める 仁津志
 出張のついで別府の湯にひたり 正司
 出張を氣遣ふ母の守り札 曉明
 出張の靴の底のエロ雑誌 茶佛
 出張の先で覚えた博多節 同
 出張で呼べば藝者はんの雪靴 鮎美
 出張の湯槽にうれし國訛り 同
 スキー帽被て出張に馴れてある 同
 絵ハガキで出張第一便届く 同
 出張の社長熱海に寄るブラン 草々
 スナツブ屋今日の祭を待つて 同
 出張所自炊の細い煙立て 同
 出張費引けば赤字が出てゐます 安哲

出張員お國訛りを親しまれ 安哲
 出張の一夜子の顔妻の顔 同
 出張の帯り映画へ氣がそる 同
 出張もストで門前拂ひ受け 同
 始めての出張母も門送り 同
 出張の日取り茶臼を取つて置き 七面山
 出張の外食券は持ち帰り 竜雄
 新妻へ所書きした旅に出る 同
 出張ばかりしてはんのか高利貸 日瀨子
 出張のついでに義理を済ませ 同
 出張へつぎはぎだらけの標準語 風浪
 出張へみんないの音が寄つてくる 仁津志
 出張へ妻ホマードを入れてくれ 同
 佳用件が済んで旅情の灯に坐り 同
 佳出張の宿で違ふた陽を拜み 鮎美
 佳小切手で帰る出張よりなし 同
 佳出張の弱み手形を貰つて来 錦風
 軸出張の靴も心も疲れて来 八歩
 出張の古き息子の代となり 同
 旅先きの花の白さへ書くたより 同

によつて、この情勢に拍車をかけられる様になつた。此処に於て、太閤の恩顧に報いるつもりなのか、それとも自分の野心を満足させる手段としてかは知らないが、兎に角、文臣でありながら天下分け目の戦を買つて出たのが、五奉行の一人、佐和山十八万石の城主たる治部少輔、千生飄箒の千には大分足りない石田三成であつた。尤も、次の句と言へ、その他の千生飄箒の句と言へ、悪口めいた詠み方の多いのは、一つは徳川の治世に於て詠まれたから

でもあらう。
 千なりの中に不出來は
 三ツ成 (八七編)
 枯れるはづ千成り後手は
 三ツ成 (五六編)
 千なりをまねて三なりち
 きもがれ (七八編)
 この関ヶ原の合戦に、金吾中納言秀秋等の東軍に内應する者が出た爲に、三成方の敗戦となり、三成は敗走し、所在の山谷にかくれてゐたが、後出でて捕へられ、六條河原で斬られた。時に三成年四十一であつた。

秀吉の歿後、一子秀頼によつて大阪城は益々壯麗を呈したと言へ、要するに、色々の名目によつて、秀吉の貯へた莫大の戦費を徒費させられた結果であつて、慶長十九年には冬の陣を起し、関東の軍と戦つてはみたものの、結局不利な媾和條件を受諾して、内濠ばかりか、約東の外濠迄も埋められて了ひ、到底、戦も難く、遂に城を枕として戦ふべく、翌元和元年、再び夏の陣を構へ、諸勇士の奮戦するところとなつたが、この戦に於て、木村重成に次いで、軍師眞田幸村も茶臼山に戦死をし、今や千生飄箒の面

影も夢の夢となつて了つたのであつた。
 下駄の飄箒眞田緒で持ちこたへ (一一八編)
 豊臣方の末路のあづかに眞田幸村によつて持ちこたへられてゐたことを、下駄と言つたから緒と言つて現したものの。但し、下方下駄(外法下駄)に飄箒の極印があつたことを知らない、この句の面白さが分らない。
 一方下駄、今も江戸新和泉町俗に三光新道と云ふ所に小さき土藏に板の雨除を作り、夫婦葬しの下駄工有り、今は下方の書を改め、天水桶に下宝と記せり、今も祇目上品をのみ作る。古より甲前に (八の極印を打つ。一足價銀十匁ばかり也。かゝる小工の衰微ながら家の存在すること感すべきなり(守貞漫稿))

羽守が火煙の中から救ひ出したのであつた。
 俗説に秀頼は薩摩に落ちて行き、島津家に身を寄せたとも言はれてゐる。
 さつま薬畑飄箒植るた沙汰 (二二編)
 従つて、右の飄箒が秀頼を指してゐることは勿論である。顧みるに、太閤が死に臨んで、後事を徳川家康と前田利家に託したこと、特に家康に託したことは全く無駄であつたと言へる。
 松へからんで飄箒枯れる (三九編)
 ひやうたんの蔓吹きからす松の風 (七九編)
 松は松平、つまり徳川である。

夏の陣に於て、さしもの大阪城も落城し、淀君・秀頼等皆自刃し果て、徳川秀忠の女で、秀頼の室となつてゐた千姫だけは、坂崎出

太閤の印頼朝の下駄へ打 (八九編)
 (九二編)

胃酸過多
 胃痛・胃潰瘍に
ホルモザン錠
 45錠入
 大阪・武田薬品工業株式会社

美顔水
 美顔水
 美顔水
 美顔水

いのちある句を創れ



投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正
▼原稿の日付及場所記入▼締
切毎月廿五日▼投稿先本社宛

川柳の夕 (本社)

三月五日午後五時三十分
於 大衆文化会館

本社三句会は大坂の中心、心齋橋南詰東の、大衆文化会館で夜の句会を催した。いつもと違つた顔ぶれも見えて盛会だつた。路郎師は柳話で「櫻の句について」例句を挙げて繰返され裨益するところが多かつた。川雜でなければの感を深くした。(文蝶)

出席者 路郎・瓜平・淡舟・鮎美・緑雨
吾仙・蛙声・案山子・壽安・更生・水月・蠅牛・洋水・醉月・鳥莊・水客
青丹子・掛一・正司・生々庵・翠光・里十九・豆秋・水都・わたる・貴山・靜一路・へん骨・錦風・文蝶・鬼子・洋天・白柳子・春柳・栗・小松園・良子・星登・藤彦・都・東雀・愛論・終波・霞乃・梨里・一步

兼題「夕 櫻」 麻生路郎選

夕さくら妻は歌人でありながら 芋作
賣家と知るや知らずの夕櫻 星登
欠伸してゐる鼻先すの夕櫻 白柳子
夕櫻妖情の如く暮れかゝり 生々庵
夕櫻に凡そ縁なき共縁ぎ 錦風
夕櫻一周して待つてゐる 蠅牛
夕櫻舞妓は嘘の無い形 藤彦
夕櫻都の人はのむばかり 春柳
夕櫻スリはとづくに眠で待ち 栗
追憶のひとゝき窓の夕櫻 瓜平
咲くも花散るも花なり夕櫻 星登

夕櫻見頃と母に嘘をつき 悟郎
夕櫻酔ふた女をもて余し 豆秋
かはるがはるを抱いた夕櫻 栗
裏口の客だなと知る夕櫻 天
座を抜けた下戸が見て居る夕櫻 淡舟
夕櫻ハラ／＼散つて映写幕 舟
夕櫻子供じやけんに扱はれ 西王
夕櫻観音様が出て来そう 翠光
短冊が二三残つた夕櫻 里十九
宿はもう定めたと見える夕櫻 香林
アジビラがひら／＼と夕櫻 蠅牛
夕櫻伊勢路には入る旅役者 小松園
諸きらめて三脚たゝむ夕櫻 修三
話まだつさず櫻の下で暮れ 文蝶
夕櫻便りをせよとポスト立ち 香林
夕櫻青空樂園派手に鳴り 青丹子
此処へ来て好かつたなあと夕櫻 愛論
夕さくら乙女心が一寸揺れ 文蝶
夕櫻名も無い橋を渡つて来 路郎

兼題「晩 酌」 清水白柳子選

晩酌も春まぬ男は馬鹿のやう 緑波
晩酌は九原則もみな忘れ 玄岡子
晩酌の膝へあとゝり制ふて来る 小松園
見よとせず晩酌雪を嬉しがり 水客
停電の晩酌も又乙なまの 星登
晩酌へともばくラジオ止めなき 里十九
不時収入の晩酌へ女房はやなり 同
晩酌もさせてあげたい手内職 栗
妻も子の分も集めて晩酌の酒 正司
子を死なしてから晩酌を止めよ 貴山
晩酌へ春んで来たと言はず飲み 水客
晩酌へ中風の話をなごすまじ へん骨
晩酌へよその喧嘩は面白 同
仕事場の灯を晩酌は消して飲み 鮎美
晩酌といふてほんの涙ほご 豆秋
晩酌へセンマイ電車つきあたり 紫香
晩酌の男世帯をくすぶらせ 案山子
晩酌の隣で認めて捺してやり 水客
優生學聞きつゝ晩酌まづいこと 蠅牛
儲けも呑む損も呑む夕餉なり 香林

日給二回晩酌も呑んでゐた 豆秋
晩酌へひげがびく／＼と 春柳
毎晩の酒大臣か益人か 貴山
晩酌の父へミシンの値を知らせ 醉月
晩酌はこのサラリーのほかに 水月
晩酌の外に内助のない女房 生々庵
まゝごとと晩酌があり争へず 閑王
お嬢さんを下さずに晩酌あはたり 鮎美

兼題「職員」 正本水客選

職員は流行唄でホーム掃き 星登
職員の新新らしく故郷詠り 更生
スト中の職員無表情な顔 醉月
終が出て職員うん／＼食へる 白柳子
職員に時間を聞いてネジを巻き 淡舟
職員が少く見へて通過職員 蛙声
職員の馴染みになつた迎ひの子 青丹子
つめるだけつめて職員汗をふき 里十九
一番で落つ職員に休暇の陽 鮎美
親切な職員がゐる田舎駅 瓜平
新米の職員七輪あおがされ 里十九
職員もちろはら／＼といふ寒い 香林
職員も八つ割を履く山の駅 春柳
見習の職員冷たい水を撒き 青丹子
職員へ新入の定期券 文蝶
列車事故職員走るばかりなり 錦風
通過職員水を撒きに立ち 文蝶
酔うた職員四人寄つてゐる わたる
職員は便り職員ことづかり 青丹子
職員は若さは梅の香にむせる 鮎美
もめ事へ職員の一入世間なれ 東雀
職員は櫻の枝で腫をつかれ 緑波
職員の手も寒そう田舎駅 翠光
またストは職員張るボスター 白柳子
職員に次の直行聞いてみた 春柳
職員が一人もない駅で下り 良子
職員が並んで迎へる人が降り 錦風
職員は親切尻を押してくれ 翠光
アベックへ職員パンチを強入れ 藤彦
職員に訛りがあつて手間がとれ 蛙声
ブラットの恋を職員横眼で見 文蝶
混雑を遠く見降す信多所 貴山

職員は職員らしく掃いてまき 水都
終列車出せば職員世帯のみ 生々庵
職員の声に旅路の遠さ知り 藤彦
海の改札海を見ていない 水客

席題「留守番」 須崎豆秋選

愛想のない留守番で角が立ち 良子
留守番は春か／＼にかしこまり 瓜平
留守番の夫へ炭をついで行き 里十九
留守番の日にむづかしい床の軸 耕人
留守番の来た云ひで留守番たのめ 案山子
縁側にある母の留守番 白柳子
留守番は猫の足でぞん／＼と 緑波
とく／＼来たが留守番知らぬ也 緑雨
留守番は隣に話をしてみたら 緑水
留守番は遠くの火事へ窓を開け 水客
留守番は娘首だけ出して言ひ 瓜平
留守番の影が障子へ大きく過ぎ 文蝶
留守番に鍵のかゝらぬと／＼ 貴山
留守番の留守番はつと／＼ 淡舟
留守番へ吸殻さへも無くなりぬ 豆秋

席題「薄化粧」 菊沢小松園選

薄化粧十九の春を匂はせる 壽彦
生活の疲れは言わ／＼薄化粧 水都
薄化粧待ちくたびて不味く食ひ 藤安
薄化粧紅提灯に浮き出され 淡舟
薄化粧するに新妻念が入り 靜一路
妻がきて母の化粧も薄くなり 醉月
傘もつておむかひに行く薄化粧 豆秋
都会から戻る娘の薄化粧 緑波
薄化粧夫を待たせわしなき 文子
薄化粧近所のうわさ／＼にかけず 文蝶
未亡人薄化粧にして氣をつけ 醉月
薄化粧さうやら妻の顔になり 同
薄化粧する娘へみん／＼の目さう 錦風
薄化粧した新妻に起される 靜一路
薄化粧夢よ一度しわが見え 沐天
薄化粧どこか垢ぬけした嘘 錦山
薄化粧クリームだけの色になり 貴山

誘惑をしたかされたか薄化粧	白柳子
納棺へも一度薄くつけてやり	愛論
あの人がうわさの中に薄化粧	東雀
薄化粧己が姿を信じ切り	淡舟
許嫁鏡の中の薄化粧	小松園

風呂敷がさつぱりや、釘を入れ
白柳子
豆秋

風呂敷の色が言へない忘れ物
 風呂敷の穴から芋の顔が見え
 風呂敷を大きくひろげた祝物
 風呂敷の米の丸さを持て余し

貴山 淡舟 春柳 文蝶

於 大寶文化會館

大阪の市政が施かれて六十年になる
 ので記念句會を開催した。会場入口には
 漢詩支部寄贈の川雜句會の提灯がブラ下
 つて句會寄附を出してゐる。略郎主幹は
 「大阪を詠む句に就て」と題して興趣
 の深い講演をされた。九時過ぎ盛會裡に
 散会した。(一幹事)

出處者：路郎。瓜平。玄同子。淡舟。
風路。鳥莊。錦風。生々庵。鮎美。
柳堂。蝸牛。綠南。一郎。正司。文蝶。
靜一。沒食子。美水。愛論。青丹子。
聖。奈那。案山子。豆秋。わたる。
貴山。葉平。綠波。清。繡彥。醉月。
東雀。花村。白柳子。博也。竹莊。
春柳。兔子。古方。すむ。香林。栗
草々。葎乃。梨里。

中之鳥恋を語るに狭ま過ぎる 芋作

職のない人が寝ている中之島
中之島球技返してボリスに
尉歷書をふところにして中之島
中之島河面へ二人の足を下げ
油絵の夕焼けになる中之島
手を見て行く中之島純じやもの
中之島の見えぬ喫茶の純な恋
機械体操の曲技を見るな橋
機國社市民の方がつい忘れ
一人でけてれさいなあ中之島
デモ終る所と決めた中之島
構曳に中之島とは一と昔
曳船をこんようみてる中之島
中之島人に見せたい二人なり
中之島メーデーに行つたため事
中之島約束のある人ばかり
中之島ボートの人々を呼んで居る
上衣なびでプラム歩く中之島
大阪の西洋だすと中之島
中之島の見えるオフィス赤字也

兼題「地下鉄」 水谷鮎美選

地下鉄を出て喫ふタバコの美味い空
地下鉄で揉まれ踏まれて押し出され
地下鉄とバスに別れる共嫁ぎ
地下鉄が涼しい風を押して来る
地下鉄の隅易者の灯がゆれる
川の下走つてんれと子におしえ
地下ホーム煙草を捨てて順を待ち
三犯と二犯地下鉄で又出合い
地下鉄へ降りるに母の手をうなず
地下鉄を降りて南の灯にまぎれ
毎度御乗車スリにも地下鉄礼を云ひ
ワイ

地下鉄で通ふ油の腕をなで
地下鉄の脂粉女給がダンサーか
地下鉄を出れば夜空阿倍野橋
禪落の地下鉄へ来てまたしやがみ
地下鉄を出て春雨に濡れず過ぎ
大阪の雨地下鉄で濡れず過ぎ
文五郎とは地下鉄も氣がつかず
地下鉄の壁のしずくは川のもの

草々
瓜平
豆萩
一秋
葉郎
菜光
淡舟
同
渡金子
東雀
繭彦
錦風
古方
文蝶
貴客
静一路
葉平
生々庵
栗

葉光
醉月
竹莊
淡舟
案山子
春柳
文蝶
鳥莊
水客
青丹子
生々庵
籩彦
栗

香林
籩彦
白柳子
没食子
草々
豆萩
貴山

地下鉄を出て喫ふタバコの美味い空
地下一帯で柔まじり詰まれて押し出され
酔月

地下鉄がバスに別れる共嫁ぎ
地下鉄が涼しい風を押して来る
地下鉄の陽易者の灯がゆれる
川の下走つてんれと子におしえ
地下ホーム煙草を捨てて順待ち
三犯と二犯地下鉄で又出合い
地下鉄へ降りるに母の手をつなぐ
地下鉄を降りにて南の灯にまぎれ
毎度御乗車スリにも地下鉄礼を云ひ
ワイ　　地下鉄の停電
地下鉄で通ふ油の腕をなで
地下鉄の脂肪女給がダンサーか
地下鉄を出れば雨空阿倍野橋
禰落の地下鉄へ来てまたしやがみ
地下鉄を出て春雨に濡れず過ぎ
大阪の雨地下鉄で濡れず過ぎ
文五郎とは地下鉄も氣がかす
地下鉄の壁のしずくは川のもの

竹莊
淡舟
案山子
春柳
文蝶
鳥客
水莊
雷丹子
生々庵
篠彦
栗林
香林
籀彦
白柳子
没食子
草々々
豆秋
貴山

葉光
文蝶

遠足に、壽司紅しようが残して來
又こゝろすし屋が出来るカンナ屑
巻すしに明日の天氣を子は拜み
すし加工二号らしいが米を出し
すし委託よつぽど米があるらしい
子に盛つすしはかやくの多い三
重海老まだ泳いでる 壽司の上
をろくろと泣いてるの利きを賞め
新聞に包んだ窓の加工 壽司
女房に内証で一合 壽司に交へ
櫻うら／＼わさびの利いた握り 壽司
謀の詩司凄ひ儲けと見てとられ
石松のせりふですすしをすゝめられ

立食ひの世辭わさびへ山葵がきつうき、
好きだつたすしを供へる佛の日
巻すしへ花がチラ／＼落ちてくる
開米を包んですしや急ぐ也
珍客へ妻はあわてぬ加工すし
いなりすし別れ話を聞いてゐる
すし造る妻へ手傳う海苔を焼き
のり巻に季節の香り巻さ込まれ
別れ話で齒にうづく 壽し
熱い茶にとるの山葵の利加減
第二世日本の壽司が御氣に召し
のりの饅飯の加減もこのすし
お土産のすしは寝巻のままで食べ
竹越しの巻すし海苔が指に着き

同 豆 秋 愛 論 春 柳 東 雀 柳 一 郎 柳 鮎 美 醉 月 香 林 同 栗 正 司 青 丹 子 豆 秋 綠 雨 竹 莊 竹 莊 水 荳 客 愛 論 白 柳 子 錦 風 醉 月 案 山 子 豆 秋 沒 食 子

ぼろぐと泣いてわさびの利きを賞め
新聞に包んだ窓の加工藤司 鮎 美 郎

女房に内証で一合壽司に交へ
櫻うら／＼わさびの利いた握り壽司
其の壽司凄け儲けと見てとられ
石松のせりふですすゝをすゝめられ
立食ひの世辭へ山葵がきつゝき、
好きだつたすしを供へる佛の日
巻すしへ花がチラ／＼落ちてくる
闇米を包んですすゝや急ぐ也
珍客へ妻はあわてぬ加工すゝ
いなりすゝし別れ話を聞いていゝ
すゝし造る妻へ手傳う海苔を焼き
のり巻に季節の香り巻き込まれ
別れ話で齒にうづく壽し
熱い茶にとるの山葵の利加減
第二世日本の壽司が御氣に召し
のりの饅飯の加減もこのすゝし
お土産のすゝしは寝巻のままで食べ
竹越しの巻すゝし海苔が指に着き
没食子

醉月
香林
同
栗
正司
青丹子
豆秋
綠雨
竹莊
竹莊
水客
竹莊
愛論
白柳子
錦風
醉月
案山子
豆秋
没食子

下駄やけに舞なり花

高下駄の音がキレイな京の雨
高下駄を履いだ坂場の背に伏し
高下駄の二程走らばスワフルト
高下駄を履いて写真の列に立ち
高下駄が乾き蝶々がとまりに來
高下駄へは足で掃る春の雨
高下駄で佛金取上間に立ち
高下駄の片つに提げて子がぬり
鶴装道路高下駄をはき道で走り
高下駄で來て睡雀の夜が更け
高下駄を素足にはいて智能犯
高下駄もきれいに脱いでお茶の会

博也
花水
美村
鳥莊
鮎美
春柳
繇彦
草々
白柳
鮎美
鶏城
豆秋

美 緑の燈の古く懐く平野の美

鑑札を立てゝ夜店の灯をもし
 夜店の灯廻轉に立ちつくし
 顔役は夜店をちろとにらみつけ
 寝呆けき子泣かして夜店荷を仕舞ふ
 夜店も根のある草を賣つてゐる
 ちよつとはなすとも夜店の客を吸ひ
 夜店の灯輪投げに見と子と遊び
 内職の夜店給仕へ欠つけられ
 座ぶさの下へ夜店の金銭を入れ
 ほろくそに言ふ夜店は賣り捌き

蝸牛山美正蝸牛風路博也司貴山美正蝸牛

手夜店ぶらりと通る丈け 兎

夜店巡廻つて帰る共轢きわたる
復興の夜店直拔けのように出る
春さむき夜店に七味とうがらし
灯の方へ向いて夜店はつりを出し
まだおまけ出そうで夜店買へなり
夜店もう仕舞うさへ食へに来る
文 花 瓜 豆 没 食
 村 平 秋 子 子

のもし市長で知事といんかする 豆

行政整理市長は更痛害を強い
赤字をばハンコにかせた市長です 春柳

初夢に話浮々かけて居り
 餅が信じられない寝正月
 神様の餅をぬすみが先に食べ
 餅搗も隣同志の仲のよき
 井戸端の心ゆかしき鏡餅
 といふは近所へ配る餅も掲ぎ
 いつの間にも餅箱の底が見え
 掛簾の威勢はごんに搗かぬ餅
 皆の眼を集めて餅がふくれ出し
 鉢巻をしてつくほどの餅でなし
 子供びみかんを買ふてからはいり
 子の客はみんな密柑で済まされ
 マドンナの前では密柑するを取り
 密柑一つもらつて帰る子のつかひ
 みかん取りく／＼愛人の頬をつき
 かかるたむきいづまで続く窓明り
 お饅頭を華露しているかるた全
 儒かめ会社ガストをやつてゐる
 ストライキ親の死に目にあひこね
 ストの朝二た駄歩く氣で出かけ

一樹和揚燕鮎樹凡楊樹豆揚一凡樹一燕二一凡
 笑甫水甫市美甫夫甫秋甫笑水甫笑子葉笑水



編輯室にて

▼いつの間にか花が散った。やがて新緑だ。▼各地の柳界もだんだん賑やかになって来た。▼我が社でもいろんな催しが次々と行はれるので編輯局も多忙の連続である。▼前田伍健氏から「放送された川柳の村」をいただいた。地方文化の開發のために有意義な記事だと思ふ。石原青竜氏の「かくて桃源の夢は続く」は氏一流の雄筆である。私とは多少意見の相違はあるがその熱には敬意を表したい。▲阿達義雄氏の「千生飄軍」下は地味ではあるが、古句研究家の

興味を呼んでゐる。▲「雑筆春秋」はしばらく休載したが、次号あたりから復活させたいと思つてゐる。▼窓口は休載した。▼「香久山の春」は錦風、文蝶、鮎美、瓜平、白柳子、路郎の合作である。久しぶりの吟行であつたのでみんなによろこばれた。▼東京に川柳の支部が出来た。尾崎にも出来た。外に支部を申込んでは次号に発表しよう。詳しいことは次号に発表しよう。▼本号から値上した。インフレであるが、金詰りであるうが、いのちのある限りは続けたい。御支援をお願いします。(路)

動 静

▼本社主催の「市政六十周年記念川柳会」は四月二日午後六時半から

本社旬会は 六月五日(日) 午後一時

大阪市南区鶴野之町六八 大宝文化会館 兼題「時計」「伸よし」「電話」各三句

午後二時図書室で開催▼南区医師会文化部川柳会は四月十九日夜、大宝文化会館で開催▼南海電鉄川柳会は四月廿日午後五時半から南海本線羽衣駅合宿で開催▼国鉄西日本川柳大会が四月廿四日午前九時から城崎の國鉄の寮で開催▼篠山芋作氏川柳荷荷祭が四月十日午

後二時から丸山通の同氏宅で開催された。以上何れも路郎主幹出席、なほ南海の会へは、川村好郎氏が、稲荷祭には麻生路郎氏と須崎豆秋氏が出席された▼八代川柳

募 集

課題吟募集

ミシン(十句) 夷一笑選 (六月五日締切)

(十句) 武部香林選 (七月五日締切)

毎号募集

近作柳樹雜誌廿句 麻生路郎選 川柳塔(雜 詠) 麻生路郎選 文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。▼「川柳塔」への投句は不朽詞會員に限る。

川柳雜誌

B列5号 毎月一回一日発行 第四卷 第四号 (送料三〇円) 一冊 金三〇円 (送料三〇円) 牛ヶ年概算 金一九八円 一ヶ年概算 金三九六円 昭和廿四年四月廿五日印刷 昭和廿四年五月一日発行

ハイキング

割引乗車券発売

Table with 2 columns: Route (e.g., 多武峯-石野台-四寺コース) and Price (e.g., 85円). Includes routes like 多武峯-石野台-四寺, 赤目-滝-探勝, 羽曳山, 二上岩屋, 河原田堀水越味, 葛城山麓弘川寺, and 金剛山.

お問合せは...上本町営業課・天王寺営業課

趣味と教養の殿堂

松坂文化クラブ

會員募集



松坂屋

大阪日本橋 電南二一七番

- 目 録: 華道(小原流・末生流), 茶道(表千家流・宗廟), 洋裁・書道・日本書, 華曲・舞臺, 手藝・古典・新舞踊, 長唄・小唄・謡曲, 服飾デザイン, 詳細お問合せは 七階文化クラブ事務所へ

Made in occupied Japan

川柳雜誌社

発行所 大阪市住吉区南船場五丁目二番地 電話 七五〇五〇

三年八月廿二日永眠された▼奥津啓一氏は東京都中目黒四ノ一五〇八へ轉居。